女子校生令嬢たちの淫らな保健実習

岡下誠
挿絵／大柴宗平

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

序章 …… 004
第一章 誘惑の放課後 …… 013
第二章 お嬢さまに保健実習 …… 077
第三章 ブルマーとスクール水着 …… 132
第四章 眼鏡娘に性教育 …… 180
第五章 下着検査と生徒指導 …… 231
終章 …… 285

登場人物 *Characters*

六条桜子
（ろくじょう　さくらこ）

都内の名門・姫琴女学院に通う旧家のお嬢様。艶やかな黒髪、近付きがたい優美な雰囲気の持ち主だが、根は真面目で素直な少女。ただ、いささか世間ずれしている面もある。

山城飛鳥
（やましろ　あすか）

陸上部所属のスポーツ少女。雌猫のような雰囲気の快活な美少女で、悪戯っ気たっぷりの言動で薫を翻弄する。

伊勢由香里
（いせ　ゆかり）

読書好きで、眼鏡をかけた物静かな少女。真面目な性格で、放課後しばしば薫の下へ質問をしに来ている。

関島薫
（せきじま　かおる）

この春に大学を卒業、姫琴女学院に教師として赴任したばかりの青年。教育熱心だが、年頃の女の子と接するのがやや苦手。

「うううぅぅ……」

それでも薫は耐え抜く。男性器から流れ込んでくる快楽に全身を灼かれながらも、下腹部に力を込めて射精への情動をどうにか抑え通した。

しばらくこらえているうちに、飛鳥の様子に変化が現れてくる。

「あぁぁ、あひっ……あんっ……。ま、まだなんですか……？」

額には、いつの間にか脂汗が光っていた。嗜虐のぬめりを帯びていた表情に、わずかながらあせりの色が滲み出ている。半開きの唇からあふれるよがり啼きは、次第次第に差し迫ったものとなりつつあった。

「ここままじゃ……私の方が先に……んっ、ああぁ、ひいぃ……」

飛鳥の腰づかいが幾分か弱まってきている。いまだに飛鳥が主導権を握って尻肉を跳ねさせてはいるが、快楽のあまり脚から力が抜けかけているのだ。

荒々しい騎乗位性交で新任教師を責め立ててはいるものの、それは飛鳥自身にも快感となって跳ね返っていた。男性器をしごき責めすることは、たくましい肉杭で女陰穴をえぐり上げられるということでもある。

大きく笠を広げた亀頭で膣穴を押し広げられ、秘めやかで感じやすい粘膜をこすり上げられ、否応なく歓喜の音色を奏でられてしまう。

（飛鳥くん……。僕のもので感じてくれているんだ……）
薫は、飛鳥の官能が切迫しているのを見て取り、あおむけのまま腰をはね上げた。
強ばりきった肉杭で、濡れ咲いた女陰花をえぐり上げる。
「あひっ、ひいっ、ああんっ……。あそこ、突き上げないでください……」
これまでは教師をからかう風でもあった飛鳥の声音に、哀願の調子が濃くなりつつあった。聞こえよがしの嬌声ではなく、男性器の打ち込みによって啼かされている。
「そんなに激しくされたら……私の方が……んあぁ、ああっ……んああぁぁ……」
たくましい肉柱で女陰穴を突き上げられるたび、スクール水着をまといつかせた女体は官能の喜びにのけ反っていた。大きく裾野を広げた亀頭によって秘肉穴を押し広げられ、奥の奥までこすり上げられると、めくるめく快楽を響かされる。
つい先ほどまでは飛鳥が意のままに腰をつかい、あおむけの薫を乗り犯していた。新任教師を馬に見立てて、騎乗位性交で調教していたのである。
しかし今は、腰を振らされていた。男性器の打ち込みに合わせて尻肉を跳ねさせ、女肉穴をかきまわされればそれに従って腰を揺すりまわしている。
男性器という肉杭によって女陰穴を串刺しにされ、スクール水着が絡みついている肢体をさらしものにされているのだ。

それどころか、肉杭のえぐり上げによって官能をかき立てられ、いいようによがり啼かされている。乳首や女芯をぴんぴんに尖らせ、いっぱいに押し広げられた女肉穴から歓喜の涙を流しつつ、ゆるんだ唇から喜悦の声を放っていた。

「ひいっ、あひっ、あぁん！　先生のものっ、すごすぎて……あぁぁ、あんっ……」

調教師のつもりで騎乗していた飛鳥は、男の象徴にすっかり征服されてしまったのである。男性器のたくましさに屈服させられ、突き上げに命じられるまま悶えていた。

（あの飛鳥くんが、僕のもので……？）

薫の中で牡欲が熱く沸きたぎる。

これまで振りまわされっぱなしであった飛鳥を、自らのもので意のままによがり啼かせているのだ。スクール水着をひん剥かれた格好の女体を串刺しにして、無毛の股間に咲く女肉花を嬉し泣きさせているのだ。

そのことが牡としての自信となり、男根の突き上げを一層のこと荒々しいものにする。快楽に脈動する男性器で、濡れ乱れた女肉穴を力強くえぐり上げた。

「あひぃっ、んあぁぁ！　い、いくっ……いっちゃいそうです……」

絶え絶えの息づかいでよがり啼きながら、飛鳥は上体を反り返らせている。

「ねえ、桜子……。代わって……。このままだと私……ひいっ、んあぁぁ……」

小悪魔的な振る舞いで新任教師を翻弄してきた飛鳥にとって、男の腰づかいで気をやらされてしまうことはこの上ない恥辱なのだろう。野性味のある美貌では歓喜と恥じらいとが複雑に入り混じっており、凄絶な妖艶美となっていた。

「し、仕方がありませんわね……」

男性器を横取りされた形になっていた桜子は、気品ある美貌に一瞬だけ喜びの表情を浮かべた。すぐに澄ました表情を取り繕ったが、頬は桜色に上気している。

「飛鳥さんがそこまで頼むのでしたら、代わってあげてもよろしいですわよ……」

紅潮した顔をうつむかせたまま、ブルマーと下穿きを太腿の付け根までずり下ろした。みっしりと茂った陰毛と、濡れ咲いている姫花肉とをさらけ出す。

「水着だけではなく、ブルマーにも慣れていただく必要がありますから……」

上半身には体育シャツをきっちりと着ているし、下半身に穿いているブルマーも完全に脱ぎ下ろしたわけではないのだが、恥ずかしいところだけがことさらに露出している。ある意味で全裸よりも扇情的な姿だ。

「は、早くして、桜子……。私……もう……んうぅぅ……」

快楽のあまり腰が抜けたようになっている飛鳥は、脱力した女体を叱咤して何とか尻肉を浮かせ、中心部を貫く肉杭からようやくにして逃れた。

飛鳥の発情汁によって照り輝いている勃起男根を、今度は桜子がまたぐ。
「ようやく……いただけるのですね……」
旧家の令嬢は、誰に言うともなくつぶやいた。
いつもは冷ややかな高貴さを宿している瞳に、今は女の媚情が渦巻いている。
同級生がよがり悶える姿を間近で見せつけられて、肉感美にあふれる肢体には桜子自身が気づかないうちに欲求不満が溜まっていたのだ。清らかな色合いをした花弁は、男のものを求めて左右に咲きめくれている。最も感じやすい蕾は、浅ましく身をふくらませて包皮から顔を覗かせていた。そして、まだ薫の男性器しか知らない姫肉穴は、物欲しそうな喰い締めを繰り返しつつ熱い蜜汁をもらしている。
麗しく冷涼な美貌とは対照的に、股間の姫唇は『女』としての一面を覗かせていた。
「こ、これは、あくまで研修の一環としてしているんですのよ。私が好んでしているのではないということを、くれぐれもお忘れなくっ」
旧家のお嬢さまは、紅潮した美貌をわずかに背けながら一方的にまくし立てた。
言うだけ言ってから、むっちりとして肉感的な尻を少しずつ沈み込ませてゆく。しとどに濡れ潤んだ姫肉門で亀頭をとらえ、浅くくわえ込んだ。きれいな薄桃色の花びらを、肥大した肉瘤にしっとりとまといつかせる。

「んああぁ……」
男と女の秘めやかな粘膜同士が絡みついた瞬間、桜子は熱い喘ぎをもらした。
欲しくて欲しくてたまらなかったものに触れて、歓喜が全身を駆けめぐる。電撃を受けたかのように、肉感的な肢体がひくひくんと引きつった。
満たされずにいて悶々としていた牝欲が一気に昇華して、官能の喜びとなったのだ。
「体育着姿の女生徒に……しっかりと慣れていただきますわよ……」
浮かせていた尻肉をさらに下ろし、飛鳥の蜜汁でぬらめいている肉柱を受け入れてゆく。ふしだらに濡れ潤んだ姫花肉を男の象徴に捧げる。
「はぁぁ……あっ、んんぅ……。薫先生のものが……私の中に……あぁぁ……」
たくましい男性器を飲み込んでゆくにつれて、まだ肉交に慣れていない膣穴が押し広げられる。容赦なくこすり上げられる。牝の欲望にぬめり潤んでいた秘粘膜は、まがまがしく笠を広げた亀頭でえぐられるたびに喜びの音色を奏でた。
大きく拡張された女肉穴は、苦しさと嬉しさとがない交ぜになっているかのように蜜汁を滴らせている。そのすぐ上では、穢れない薄桃色をした陰核が浅ましいまでに尖り立っており、受け入れが深まってゆくにつれて引きつっていた。
むっちりとして肉感的な美脚は、歓喜の脱力に見舞われて細かにわなないている。

とうとう脚に力を入れていられなくなり、豊潤な桃尻が重みにまかせて落下した。
「あひっ」
そそり立つ肉柱を根本まで勢いよく飲み込むこととなり、腰全体に快楽が響き渡る。強靱な男根に荒々しくえぐり上げられて、姫肉穴はひくひくとよがり悶えていた。
「はあぁぁ……。こ、腰に……力が入りませんの……」
欲求不満が渦巻いていた姫口を男の象徴で貫かれ、腰が抜けるほどの喜びを味わわされてしまう。豊かな尻肉を上げ下げすることさえままならず、ずり下ろしたブルマーを太腿の付け根に絡ませたまま新任教師の腰にまたがっていることしかできない。
飛鳥がそうなったように、男性器という肉杭で串刺しにされて、足腰に力が入らなくなってしまったのである。快楽に打ちのめされ、ぐったりとなっている。
言うなれば、男の象徴によって征服されてしまったのだ。
ただの一撃で。
「で、でしたら、僕の方で腰をつかいますね……」
あおむけの薫は、牡欲のたぎりにまかせて腰をはね上げる。
令嬢の身体が浮き上がるほどに腰を躍動させ、強ばりきった肉柱で女陰穴をえぐった。歓喜に泣き濡れている姫口を、裾広がりの亀頭でこすり抜く。

「んあぁ、ひいっ、ああぁっ……。いきなり、そんなに……ああんっ」
男性に特有の力強さで突き上げられるたび、桜子は喜びの声を上げさせられていた。たくましい男根で股間の秘唇をえぐられ、その喜びが唇からあふれているのだ。
体育シャツの胸元にできた大きなふくらみも、薫の腰づかいに合わせてゆさゆさと揺れ弾んでいる。たっぷりとした量感があるだけにその揺れは激しい。手のひらに収まりきれないほど豊かな乳房は、躍動的に舞い跳ねていた。その様は、男を挑発しているようでもあり、男の愛撫をねだっているようでもある。
「か、薫先生……。そんなにされたら……あひっ、ああっ、あんっ……」
桜子は、自ら腰をつかう余裕など最初からなく、薫の突き上げに命じられるまま、ただただよがり啼かされていた。新任教師を調教するなどという感じではなく、逆に男性器の力強いえぐり込みによって女体の性感を開花させられている。
「そんなことでは、薫先生の研修にならないでしょ」
マットの上では飛鳥が自慰にふけっていた。
スクール水着の股布を紐状に絞り上げて、無毛の女陰門に喰い込ませている自らの手でくいくいと引っ張り上げることによって、快楽を貪っているのだ。そればかりでなく、胸元からこぼれ出た乳房を手荒に揉みしだいていた。

薫に責められて絶頂に追いやられるという牝恥からは何とか逃れたが、令嬢のよがり悶える様を見せつけられて、我慢ができなくなってしまったのだ。男性教師や同級生の前だというのに、欲求不満に泣く女陰を自ら慰めずにはいられないのだ。
「私が手伝ってあげる……」
ポニーテールの美少女は、令嬢の背中に抱きついた。体育シャツを首元までまくり上げて、ハーフカップブラジャーに包まれた豊乳をあらわにする。
「あぁぁ……飛鳥さん……？　何を……」
「乳房も露出した方が、薫先生も興奮するでしょ」
通常の半分ほどしかないカップを容赦なく剥き下ろし、薄紅色の乳首を摘み上げた。乳汁を搾り取ろうとしているかのように、根本からしごき上げる。
「ひいっ、あひぃっ！　あ、飛鳥さんまで……んあっ、あぁぁぁ……」
艶のきらめく黒髪を揺らしながら、高貴な令嬢は肉感的な肢体をくねらせていた。牝欲を溜め込んで膨張していた乳首を交互にしごき抜かれ、快楽が噴き上がる。歓喜の脈動とともに、不可視の乳汁をほとばしらせているかのようだ。
「ほら、もっと腰をつかって」
飛鳥は、令嬢の肉感的な尻へ股間をあてがい、ぐいぐいと押しやる。

「わ、私……薫先生のを……」
眼鏡に彩られた美貌には確かに苦痛の表情が浮かんではいたが、それ以外のものも見て取れた。少女から大人の女になったことへの喜びがほのかに香っていて、いつもの知的な美しさに女の色香が加わっている。
「薫先生ので、教えていただいたんですね……」
眼鏡の奥にある瞳は、うっすらと涙を滲ませていた。
「由香里くん……」
少女の美しさに心を奪われつつ、薫はゆっくりと腰を押し進めてゆく。
たくましい男性器は、処女を散華させた喜びにのたうっていた。何ものにも踏み荒らされたことのない膣奥を容赦なく押し広げ、力強くえぐり分ける。肥大した肉瘤でこすり上げることによって、未経験の膣穴を奥の奥まで征服する。
「あっ……あぁぁ……。薫先生のが……んうぅ……」
悲鳴ともよがり啼きともつかない声で喘ぎながら、眼鏡娘は華奢な女体を引きつらせていた。太すぎる肉杭で強制拡張され、膣口はひくひくと収縮している。
ついには男性器の根本まで打ち込まれると、緊張から一気に解き放たれたためか、細身の身体はぐったりと脱力した。

「はあぁ……。薫先生……」
目尻に涙を輝かせながら、眼鏡美少女は陶然とした顔つきで薫を見上げている。
いっぱいに押し広げられた女肉穴からは、処女血涙が滴り落ちていた。
「よく頑張りましたね、由香里くん……」
喜びに脈打つ肉柱を根本までえぐり込んだところで、薫はようやく腰を止める。
(こうして見ると、由香里くんって本当に清楚で可憐だな……)
処女から大人の女に羽化したばかりの由香里は、その一瞬だけしか持ち得ない美しさに輝いていた。牡欲のままに腰を振るいたいという衝動を懸命になって抑え込み、教師として女生徒を気づかう。
しかし、腰の打ちつけは意思によってこらえられるが、男性器の脈動まではこらえられない。男の象徴は、薫の中で抑圧されている牡を正確に反映して、猛々しく跳ねのたうっていた。知的美少女の処女を散らせたことに興奮して、血涙の滴る膣肉穴を牡欲が求めるままにえぐり上げている。
「んあぁ、ああっ、あひぃぃ……。薫先生のが……跳ねています……」
恍惚とした表情で眼鏡美少女は甘い悲鳴をもらしていた。
「す、すみません。由香里くんのあそこが気持ちよくて、勝手に暴れてしまうんです」

「嬉しい……。薫先生、私のあそこを喜んでくださっているんですね……」
男性器という肉杭で磔にされたまま、由香里は求められる喜びに酔いしれている。
「あぁぁ……んっ……あん……薫先生……」
まだ破瓜の痛みも引かない女肉穴ではあるが、そこに打ち込まれた男根が荒々しく脈動するたびに甘い喘ぎをもらしていた。憧れの教師に求められていることが実感されて、痛みでさえも愉悦の音色となって響いている。
「私のあそこ……薫先生のものに合わせて広げられています……」
これまで広げられたことのない処女膣穴は、太すぎるものによって押し広げられていた。伸縮性に富む粘膜は、亀頭の張り出し具合や肉胴の長さ、太さを正確にかたどっている。鍵と鍵穴との関係さながらに薫の男根で型取りをされているのだ。
「薫先生だけのためのあそこにされているみたいです……」
「由香里くん……」
眼鏡美少女への愛おしさがこみ上げてきて、薫は彼女に口づけした。
しどけなくゆるんで甘く喘いでいる唇を、自らの唇で奪う。むしゃぶるようにして吸引し、唾液にぬめった舌を何度も抜き差しした。
「んうっ……んんっ……んあぁ……んあぁん……」

最初の一瞬こそ驚いたような表情をした由香里であったが、すぐにうっとりとした顔つきになる。眼鏡の奥にある瞳は、恋する乙女の潤みを帯びていた。

まるで、唇そのものが性感帯になったかのようだ。口づけをされただけで、陶酔した由香里の精神に心地よいものが広がる。薫の舌を抜き差しされると、そのたびに甘美な官能が響き渡った。全身が媚熱に火照る。

「か、薫先生……。あぁぁ……あっ、あん……」

唇の端から涎を滴らせながら眼鏡美少女はよがり悶えていた。

股間の秘めやかな唇が大きく押し広げられているためか、唇までも結びがたくなっている。唾液にぬらついた舌をそこに打ち込まれ、むしゃぶり吸われると、めくるめく境地に誘われた。乳首も陰核も尖り立ち、欲望のうずきに悶々としている。

(清楚で可憐な由香里くんを……舌で犯しているんだ……)

薫も激しい高ぶりに見舞われていた。自らの舌を男性器に見立ててえぐり込み、かきまわし、果ては唾液を注ぎ込む。処女血の滴る姫肉門を男性器で串刺しにしたまま、上半身では唾液の滴る唇を貪っているのだ。

口づけの快楽に酔いしれている由香里を、飛鳥は蠱惑的な表情で見つめている。

「由香里さん、身も心も薫先生に奪われちゃったって感じね」

桜子は、少し羨ましそうな顔をしながら由香里の姫肉門を割りくつろげていた。
「保健体育の授業はまだ終わっておりませんのよ」
眼鏡娘の耳元へ唇を寄せ、敏感になっているそこを熱い吐息でくすぐる。
「薫先生のお情けを頂戴するまでが保健体育ですの」
耳へ口づけし、舌でねぶりまわした。
「んあぁ……はぁっ……あん……」
ゆるんだ唇を薫の舌で犯されているだけでなく、令嬢の舌で耳まで舐めくすぐられて、由香里はたまらずに身をよじらせる。そのたびに股間の中心部を強靭な肉杭にかきまわされ、鈍い痛みや猛烈な違和感を味わわされた。
「おねだり、ひとりでできるかしら？」
「は、はい……」
眼鏡をかけた知的美少女は、陶酔に潤んだ瞳で薫を見つめる。
「薫先生……。どうか私のあそこに……先生の精液を出してください……」
普段は大人しい由香里が、まだ姫肉門から処女血を滴らせているというのに、射精のおねだりまでしたのだ。薫の心はその健気さに打たれ、肉体は牡の興奮にたぎる。
「本当に、その……我慢できなくなったら、いつでも言ってくださいね」

「わたし、我慢なんてしていません……」
由香里は、ほんのわずかながらも自分から舌を差し出して、薫の舌愛撫に応えた。
「薫先生にだったら……どんなに痛くされてもかまいません……」
まっすぐな眼差しで見つめられ、薫は愛おしさと牡欲とに我を忘れかけてしまう。
「それじゃあ……いきますよ……」
激しく腰を躍動させたい情動を何とかして抑え込みつつ、ゆっくりと抜き差しを始めた。入れているだけでさえ心地よい肉穴から、強ばりきった肉柱を徐々に引き抜いてゆく。亀頭の大きく張り出した笠部分によって、初々しい膣粘膜をかきこすった。
「はぁっ……あぁぁ……」
亀頭の張り出しで処女血をかき出してから、再び膣奥を目指して勃起男根をえぐり込んでゆく。眼鏡美少女の膣穴は、肉杭が一時的にいなくなったことで安心したかのように、元の狭さに戻っていた。そこへあらためて男性器を打ち込み、すぼまりかけていた肉穴を荒々しく押し広げてやる。
「んあぁ……あ、んあぁ……。薫先生ので……あそこが広げられています……」
知的な容貌の眼鏡娘は、股間の中心部からこみ上げてくる拡張感に悶えていた。
あらためて押し広げられると、男根のたくましさを強く印象づけられる。

「薫先生って……こんなにたくましいんですね……。こうしてあそこで味わわされると……はあぁっ、想像していたのよりもずっとすごくて……んうぅ……」
大人の女性向け恋愛小説を読んで想像したことしかなかった女生徒は、生身の男性器を女肉穴へ抜き差しされて、低い呻きをもらしていた。処女喪失の瞬間に味わわされた痛みはすでに薄らいでいて、今は押し広げられる感覚に悩まされている。
「由香里くんのあそこ、とっても気持ちいいですよ……」
処女を散らされた直後の女肉穴はこの上なく狭くて、しかも怯えるようなひくつきをしていた。少女から大人の女になったその刹那にしか味わえない感触は、熱い興奮と極上の快楽とを薫にもたらしてくれる。
牡欲にみなぎった肉柱はびくびくと脈動し、喜びの粘液を吐き出していた。
「あっ……あぁぁ……。薫先生……もっと動いてください……」
男根のわずかな脈動にさえ肢体をひくつかせながらも、由香里は健気に保健体育の授業を求めてくる。眼鏡の奥にある瞳は陶酔の潤みに満ちていた。
「そ、それでは……」
眼鏡美少女がそれほど痛がっていないのを見て取り、薫は徐々に腰づかいを速めてゆく。初々しく怯えおののいている女肉穴へ、硬直した肉杭を打ち込んだ。

「んうっ、んっ、んああぁ……。薫先生ぃ……」
艶めかしい悲鳴を上げながら、由香里は女体を引きつらせている。
飛鳥と桜子によって濃厚な授業準備を施された身体は、早くも高ぶり始めていた。
「私たちも、由香里さんを気持ちよくしてあげるね」
ポニーテールの運動美少女は、右手で由香里の脚を抱え上げたまま、左手で乳首を揉み転がしている。さらに、執拗なついばみで右耳をくすぐっていた。
高貴な美貌の令嬢も、ぬらついた舌を妖艶に蠢かせて左耳を舐め愛撫している。
「薫先生のものは大きくていらっしゃるから、由香里さんも大変だったでしょう？」
桜子は、片方の手で陰核包皮を剥き下ろし、もう片方の手で敏感な蕾を揉み転がした。ぴんぴんに勃起している姫蕾を、くりくりとこねまわす。
「ああぁっ……あん……。そ、そこは……んあぁ、あっ、はあぁぁぁ……」
女体の中で最も感じやすい突起を執拗にいじくられて、眼鏡娘はさらに身をくねらせた。女芯で奏でられる快楽に突き動かされ、男根で磔にされた身体をよじらせずにはいられない。身をよじるたびに女肉穴をかきまわされてしまう。
「いかがかしら、由香里さん？　気持ちいいでしょ」
あでやかで妖しい微笑を浮かべつつ桜子は指先を蠢かせていた。

「とっても……んあっ……あひっ、ああん……」
剥き身の陰核を指腹でこねまわされて、気が遠くなるほどの官能が響き渡る。
女芯で奏でられた愉悦はすぐそばの姫肉穴にまで影響をおよぼし、痛みをさらに薄れさせた。痛みが薄らいだことで膣粘膜の感度は急激に上がってゆき、肉柱を打ち込まれるといくばくかの快感を覚えるまでになる。
「はあぁ？　ああぁ？　な、何だか……あそこが……あんっ」
打ち込みのたびにあふれる声は、もはや悲鳴ではない。
性の喜びを味わわされたがゆえのよがり啼きだ。
女生徒二人がかりで左右の耳を舐めついばまれ、勃起した乳首と剥き身の女芯とを執拗かつ繊細な指づかいでこねしごかれては、処女を失ったばかりの肉体でも否応なく発情の高ぶりに見舞われてしまう。憧れの教師から性の手ほどきを受けていることとも相まって、由香里はただ女の喜びにのみ悶えていた。
「あそこが……あああぁ、んぅっ、はあぁぁ……」
反り返るほどに勃起した男性器で姫花肉をえぐり上げられると、これまでに経験したことのない快楽が奏でられる。小説を読みながら股間へ手を忍ばせていた時の快感よりも、はるかに生々しく激しい官能が由香里を悶えさせていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

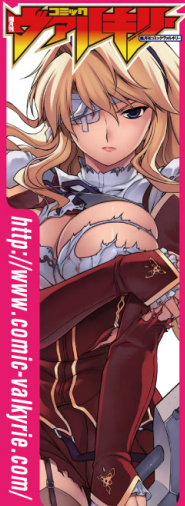
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ！
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ！
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利！
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中！



http://www.comic-valkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌！　18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出！　新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム！「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場！

http://www.2d-dream.jp/

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める！携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ！